

宮田嘉久著

『デューラーとその時代』

— 精神史の中のドイツ・ルネッサンス —

隆文館  
定価四、五〇〇円



本書の表題は、著者が本学哲学科大学院の学生であった頃から追究して来たテーマである。したがって、著者のデューラーにかけた情熱と思入れは、かれこれ一〇年にもなろうとしている。そこで、五年にわたる助手時代に書き留められた関係諸論文を、助手任期満期修了を記念して、一冊にまとめられたのが本書である。

周知の通り、本学哲学科はドイツ哲学が中心である。著

者も本来は近代初頭のドイツ思想を専攻しようと思っていたそうである。確か本人の学部学生時代の興味は、ルッターとその周辺であったかと思う。ルッターの周辺には、多くの宗教家、人文主義的知識人、芸術家などがいた。デューラーは、ルッターをとりまく芸術家の一人であった。やがて、著者の興味は、デューラーが主となり、彼をとりまく宗教家、知識人が従となった。

デューラーは、ルッターをとりまく芸術家というばかりでなく、ドイツ・ルネッサンスを代表する芸術家でもあった。だが、わが国では、イタリア・ルネッサンスのレオナルド・ダ・ヴィンチの絶大なる名声の陰にかくれて、これまでほとんど研究者らしい研究者がいなかった。純粋に美学あるいは美術史的立場からなら、確か、前川誠郎氏の『デューラー』があるだけであつたはずである。とすると、日本人の手によるデューラーの研究書は、本書で二冊目とすることになる。

デューラーの芸術を取り挙げるからには、本書もまた、当然、美学美術史的アプローチを主とせざるをえない。だが、著者は哲学あるいは思想史からデューラーにつき当たった人物である。とすると本書の論述の随所に、思想的考察が顔をのぞかせていても不思議ではない。「世界(自然)」

の発見としての「風景画」（本書八三頁〜一一三頁）活版印刷技術と芸術（同、四八頁〜八二頁）、数理学と絵画（同、一一四頁〜一六〇頁）、芸術における「主観的創造力」（同、一六四頁〜一九二頁）、『四人とネオ・プラトニズム（同、一六四頁〜一九二頁）、『四人の使徒』とプロテスタンティズム（一九三頁〜二三〇頁）といった具合である。したがって、純粹に美術史的興味で本書を手にしよとする向きには、いささか内容的にわずらわしい点があるかも知れない。しかし、本書のユニークさは、まさに、このわずらわしいと思われる思想的アプローチにこそある。

著者自身、本書のアプローチの仕方を次のように語っている。「現実から乖離した抽象的、思弁的、論理的な形而上学的「認識」よりも、われわれの眼に直接的に訴えかける現実的、具体的な個々の美的事象を感性的、直感的に扱いつつながら、それを出発点として、「美とは何か」「芸術とは何か」といった理念的ものを探求する「美学」「芸術学」……の方が、どちらかと言うと感性的人間である著者には馴染みやすかった……。」この科白は、実は「美学」や「芸術学」について言われるより、思弁哲学や論理的な哲学についていわれるべきであったと思う。というのも、いかなる思弁も、いかなる論理も、その時代の精神、いや、その

時代の個々の事象の経験、体験の積み重ねを離れてはありえないからである。著者は、今後とも、このようなアプローチで思想や芸術に迫るべきであろう。

残された問題は、まだまだ多く存在している。デューラーの再洗礼派に対する態度、更には、デューラーのクラナッハに対する態度、グリーネヴァルトと再洗礼派との関係、これら同時代の芸術家と人文主義的知識人たちとの関係等々がそれである。著者の対象に対するアプローチには、ややマニアックなところもある。この態度は、この時代の多彩な事象に迫るには、必要な態度でもある。期して続篇『デューラーとその時代』を待ちたいものである。

（清水多吉）